

1999年台湾集集地震から16年後の集集を調査しました（2015/8/16-8/19）

テーマ：1999年台湾集集地震、都市復興
場所：台湾 南投県 集集鎮

村尾 修 教授（地域・都市再生研究部門・国際防災戦略研究分野）は、2015年8月16日から19日にかけて、台湾を訪れ、1999年台湾集集地震の震源に近い南投県集集鎮の復興状況を調査しました。村尾教授は、1999年9月の地震直後から2008年までの長期にわたり、人口1万2千人ほどの集集鎮を対象とした被災・復興調査を継続的に実施し、集集の復興過程に関する様々な研究成果を発表しています。今回の訪問は7年ぶりの調査となりました。

現地では、被災からおおよそ16年が経過した時点での街の状況を、過去にお世話になった被災者に対する聞き取りや視察によって把握しました。また、鎮公所を訪問し、昨年末に29歳の若さで鎮長に当選した鎮紀衡氏にも面会し、現在集集が直面する課題について聞くことができました。

1999年の被災から5年もすると復興事業もほぼ終わり、現在の街の骨格は整っていましたが、武昌宮という震災遺構としても保存されている寺の再建は時間がかかるものでした。しかし、2014年の春には多くの関係者らの寄付金によって、ようやく新しい本堂も完成し、新旧のお寺が時間を超えて隣接する街に変わっていました。調査の詳細は、今後学会誌にて報告する予定です。



地震により倒壊した武昌宮（遺構として保存）



2014年に新たに建立された武昌宮



震災の後生まれ変わった集集街の門



現在の新鎮長 陳紀衡氏との面会